

パートナーになることと、そのプロセス

1. 概要

1.1 被害者／証人プログラムのボランティアは、クライシス・ユニット或いはページャー・ユニット（訳注‘無線機持参の車による夜間等のパトロール班’）の場合、少なくとも誰かもう一人と共に活動する。

1.2 新しいパートナーと共に活動するという経験を、それこそが、あなたの「ものの見方」や「能力」を拡げることが出来る研修の場と見なすこと。もし、何らかの理由で、あなたが他の誰かと一緒に活動したくないと思うなら、活動の契約をする際には慎重であるべきだ。しかし、自分の困難を乗り越えることは、一つのより良い解決策である。運転者ともう一人のボランティアは、半永久的なチームを組むことに同意することができる。

1.3 あなたと一緒に活動する人を理解するために、時間をかけなさい。

2. 調整の前

2.1 ページャー・ユニットで活動する場合、仕事に就く前の晩にチームを組むこと。

2.2 「危機」か「ページャー」かいずれかのコールを受けたら、現場に到着する前に、あなた達の仮の介入プランについて話し合うこと。到着して最初のリードは誰がとるかということ、明確に決めておくこと。

2.3 オブザーバーがユニットと同乗している時はいつも、特にオブザーバーが被害者証人プログラムの研修生ないしは新人であれば、彼らのスキルの許容範囲内で彼らに関与させよう。

3. コールを受けている時

3.1 コール活動中は、時々パートナーの方を見ること。パートナーがあなたにメッセージを送ろうとしているかもしれない。

3.2 あなたがリード・パーソンではない場合、状況が許した時に提供できる建設的なコメントを準備しておこう。

3.3 状況に応じて、パートナーと役割を交替する準備をしておくこと。通常、パートナーか或いはクライアントのボディランゲージから交替が求められている時がわかる。

3.4 チームメンバー全員が、コールが成功するかどうかに責任がある。リード・パーソンではない人は、ポジティブな姿勢でいることで、パッシブなやり方ではあっても貢献することができる。

3.5 コールが安全であるなら、あなたはその電話を離れたと思うかもしれない。その場合、通信指令係 dispatcher にあなたの電話番号を知らせ、ラジオの音を低くすること。これは一般に非常に長い電話でしか行われず、あなたは優先されるべきコール、あるいは通信指令係による安全確認点呼について特に注意深くなければならない。決してラジオを切ってはならない。

4. コールの後

4.1 出来る限り早く、Do-Look-Learn モデルに従ってコールを処理すること。

4.2 コールについて話し合う場合、クライアントとあなたのパートナーおよびあなた自身の反応や感じ方についての、あなたの印象を含めて考えること。

4.3 パートナーは皆、フィードバックを与え受け取って、建設的な批判を受け止め利用することが出来なければならない。

5. その他

5.1 バックアップ・スタッフや他のクライシス・ユニットの人達もまた、あなたのパートナーであると考えなさい。必要なら、過重なコールを他のユニットと共にコーディネートする。時には、特に困難なコールについて話し合うため、彼らとのミーティングの場を持ちたいと思うかもしれない。

5.2 あなたとあなたのパートナーにストレスが及ぼす影響を自覚することを忘れないこと。あなた方のいずれかに必要だと思われたら、ちょっとしたストレス発散を試してみよう。